2023年9月24日（日）主日朝礼拝説教

『キリストに結ばれた生き方』　井上隆晶牧師
Ⅰコリント4章11～17節、マタイ23章32～37節

❶【当時の教会の状況】

パウロは人生で三回伝道旅行をしました。ローマ帝国内の主にシリア、トルコ、ギリシャ地方ですが、彼の伝道によって多くのキリスト信者が生まれました。でも教会堂もあるわけではありません。信徒たちは大きな家を持つ商人や貴族などの家に集まって共に礼拝していました。（家の教会）パウロは伝道した後、その場所にとどまらず、まだ福音が伝えられていない場所に旅を続けました。教会共同体にはまだ定住する教師がいたわけではないのです。教師も、新約聖書も、信条もなくキリスト教は非常に幼い状態でした。そんな教会に次から次へと「偽の教師」がやってきます。彼らは違った福音を持ち込んでは信徒を混乱させました。

●2世紀に書かれた『ディダケー』（十二使徒の教訓）という書物があり、その11章から16章まで「教師」についていろいろと書かれています。例えば、
「もし三日もとどまるようなら、彼は偽預言者である。…金銭を要求するなら彼は偽預言者である。…霊によって語る者がみな預言者だというわけではなく、主の道を持つ者だけが預言者である。…真理を教えても教えたことを行わぬ預言者は、偽預言者である。」

こんなことが書いてあるという事は、偽の教師、偽預言者が大勢いたということなのです。パウロの手紙には何度かそのような話が出てきます。例えばガラテヤ教会では、「**あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つの別の福音があるわけでもなく**」（ガラテヤ 1：6）とあります。これは律法（ユダヤ教）に逆戻りしようとする教えです。コリント教会ではグノーシスの影響を受けた偽のキリスト教が入って来ました。グノーシスというのは「**知識**」という意味ですが、彼らは救われるためには「**知識・知恵**」が大事であって、行いはどうでもよいと教えたのです。手紙を見ると、パウロが「**わたしたちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。**」（1：23）「**キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためです。**」（1：12）と語っていて、知識ではなく十字架という愚かに見える愛の業を強調しているのが分かります。

❷【キリストに結ばれた生き方】

19節でパウロは「**高ぶっている人たちの、言葉ではなく力を見せてもらおう。**」（4：

19）と語ります。彼は自分は賢いと高ぶっている偽の教師たちに、口ばかりでなく愛の実践を見せてもらいたい、と語り「**キリストに結ばれた自分の生き方**」を学ぶようにと信徒たちへ勧めています。それは一言でいうなら、人を愛し、自分を犠牲にしてゆく生き方でした。具体的には10節～13節に載っています。

私たちはなぜキリスト教徒になったのでしょう。神が人になったということ、キリストによって罪が赦されるということ、やがて復活してキリストと同じ永遠の命を得られるということなど、どうして信じられたのでしょう？不思議としか思えません。私がキリスト教徒になろうと思ったのは、最初からそのような神秘が分かったからではありません。一言でいうならキリストの生き方に魅了されたからです。**彼がなすことはそのまま「神の姿」「神の愛」を現していると思ったからです。**もし彼が奇跡だけを行い、十字架にかからず王座に座り、偉大な事業を行ったなら私は信じなかったでしょう。あの十字架という苦しみと犠牲の中に完全に神の愛、神自身の姿を見たのです。強く、栄光に輝く神ではなく、人間の罪と死を連帯される弱くなった神こそ本物だと思ったのです。**なぜなら、私が求めたのは強さではなく、完全な愛だったからです。イエス様の中に完全な愛を見たのです。**そして私もそのような生き方がしたいと思うようになりました。私の好きなロンカート神父の話をします。

●バチカンに勤める尻枝正行神父という人がいます。彼は少年の頃、戦争で父親を亡くし、家も焼かれ、戦後の焼け野原で生きていくために、アメリカ軍の援助で建設中であった教会に釘どろぼうに入りました。ピカピカ光るアメリカ製の釘を急いでリュックに詰めているとき、突然黒い服をまとった外国人に首筋を押さえられました。瞬間、彼は真っ青になりました。まぶたに薄暗い牢屋と悲しげな母の面影が浮かびました。ところが驚いたことに、その外国人は彼を殴ることもせず、捕えもせず、彼のリユックをとって、その中に入るだけの釘をつめ始めました。そして何も言わず、彼を帰してくれたのです。門のところで「足りなかったら、またいらっしゃい」と一言言ったきりでした。尻枝少年はきつねにつままれたように、その夜は一睡もできませんでした。他人がくれるものは何でももらう。しかし自分からは何一つ他人にやらない、という戦後の時代に「与える」ことの尊さを教えてくれたあの外人さんのごぼうのような太い指と、どこまでも澄んだ青い目が彼の頭から離れませんでした。明け方、彼は「理想を見つけたぞ」と叫ぶなり跳ね起き、そのまま 4 キロの道を教会まで走りました。そしてあの外人さんを見つけ「先生、私は陸軍大将になるのはやめました。先生みたいになりたいです。お願いします。教えてください。」と頭を下げたのです。彼の人生の師であるあの外国人は、名をロンカート神父といいました。ロンカート神父はいつも「正行、私は日本の土になりたい」と言っていましたが昭和30年2月、東京の育英学園の火事のとき、逃げ遅れた彼の同僚を救おうとして火の中に躍り込んだ

ま、二度と戻ってきませんでした。腕にしっかりと若者を抱いたまま焼け死んでいました。

このような生き方こそ本物の生き方だと思いますし、出来るかできないかは別としてそのような生き方に無性に憧れるのです。

❸【教会は失うことを恐れてはならない】

先日、大阪キリスト教連合会の役員会で、バプテスト連盟の先生が教団が行った信徒大会の様子を話して下さいました。若者たちが教会に来ない理由として、「自分たちの負担や重荷を若い人たちに担ってほしいという教会の下心が見えてしまうと、若者たちは来なくなってしまう。基本は若者一人一人のためにどれだけ犠牲を払えるかという事ではないだろうか。」と言われました。それを聞きながら私もその通りだと思いました。

教会に人が来ない、人が来ないと言いますが、カルトの救出活動をしていて 100 人脱会して信者になるのは 10 人くらいです。だいたい十分の一です。イエス様の所に 10 人の重い皮膚病の人がやって来て 10 人とも癒されましたが、イエス様の所に戻ってきたのは一人だけでした。これも十分の一です。その人に向かってイエス様は「**あなたの信仰があなたを救った。**」（ルカ 17：19）と言われました。癒しと救いは違います。教会は癒しだけでなく、救いを与えるところです。そんなに信者の数が増えるわけではありません。一人を救うためにはものすごい犠牲が必要なのです。それは昔も今も変わらないのです。

今の教会は何か違います。集まれば「人がいない、お金がない」というような話ばかりしています。守りに入っていて、失わないように、手放さないようにしています。それでは駄目だと思います。教会は出かけて行かなければなりません。イエス様は「**あなたがたが出かけて行って実を結び**」（ヨハネ 15：16）と言われました。出かけて行くということは、いろんな人と出会うということです。**いろんな人と関わり、犠牲になるということです。失うことを恐れてはなりません。得ることではなく、他者のために失うことをもっと考えなければなりません。**キリストに結ばれた生き方とは、そのような生き方なのだと思うのです。

●アッシジのフランチェスコの祈りの中にこのような文章が出てきます。
「慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。」

勇気をもってキリストのように生きてゆく者となりましょう。